

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2024年5月 NO.235



[もくじ]

- 2～3 舞台「Le Fils 息子」・「La Mère 母」高知公演 岡本圭人インタビュー
- 4～5 第33回高知出版学術賞の審査を終えて…ヨース ジョエル
- 6～7 新しい時代の地域社会づくりは土佐の高知から…福田善乙
- 8～9 「ハードボイルドはお好きですか」と問いたい書店員がここにあります…山中由貴
- 10 映画と「ライフ・イズ・ビューティフル」なご縁…山崎伸子
- 11 「アンテナ」温仙人…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団2～3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

舞台「Le Fils 息子」・「La Mère 母」 高知公演

——岡本圭人インタビュー——

フランス演劇界を牽引する稀代の劇作家フロリアン・ゼレール。

彼の代表作『家族三部作』のうち

「Le Père 父」（主演：橋爪功）は

二〇一九年に、「Le Fils 息子」（主

演：岡本圭人）は二〇二一年に、

それぞれ高知でも上演され大きな

反響を呼びました。そして今年、

「Le Fils 息子」の再演と、家族三

部作の最後を飾る「La Mère 母」

の初上演が決定し、この二作品が

同時上演されます。去る三月、プ

ロモーションのために高知を訪れ

た俳優・岡本圭人さんに、今回の

舞台についてお話をうかがいまし

た。

——「Le Fils 息子」の再演について

この作品で僕は十八歳の少年ニ

コラを演じます。両親の離婚を機

に自分の居場所をなくした彼は、

自分ではどうすることもできない

無力さを感じて苦悩する。そんな

彼を救おうと父親は愛をもって対

話を重ねていく、というストーリ

ー。「Le Fils 息子」の初演は、僕

にとつて初舞台、初主演、さらに

父・岡本健一との親子共演でもあ

る特別な舞台です。また初演当時

はコロナ禍ということもあつて色

々な苦労もありました。でも今回

こうして再演できること、高知で

皆さんにまた舞台を届けられるこ

とがとても嬉しいです。

——再演ならではの難しさみたい

なもの感じますか？

僕も再演は初めての経験ですが、

再演って「怖い」と感じています。

自分の中に「初演でやれたんだか

ら再演でも大丈夫でしょ」という

根拠のない自信が生まれることが

怖いなど。ただ初演を思い出して

それをなぞって再演の舞台を作っ

てしまうと、その舞台はどこか浅

いものになる気がする。それはや

っぱり、初演の時みたいにもがき

苦しんで生み出したものとは全く

違うからです。だから再演にあた

っては前のことは忘れて、初心に

戻ってまっさらな気持ちで一から

稽古もやる。それをお客様に届け

たいですね。

——初演の「La Mère 母」につい

て、岡本さんの役どころは？

「La Mère 母」は、最愛の息子

が家から出て行ってしまい、心の

中に穴が開いてしまった母親の様

を描いていて、僕は若村麻由美さ

ん演じる母アンヌの息子ニコラを

演じます。「息子」のニコラと名

前は同じですが全くの別人です。

——「母」を初めて読んだときの

印象は？

自分の母親を思い出しましたね。

僕自身、母親がどんなことを思っ

ているかなんて今まで考えたこと

もなく。だから僕くらいの世代
の人も「母」を観ると自分の母親
に対して何か気付きを得られるか
もしれない。

この作品は、観ている人が、ア
ンヌを体感する、という感覚が近
いのかなとも感じています。僕も
初め台本を読んだ時はよく理解で
きなくて。でも演出を受けて稽古
をやると台本を読んだ時以上の衝
撃を受けましたし、日に日にどん
どん面白くなっていく。舞台の中
では同じシーンが繰り返しされるよ
うなことが何度もあり、頭が混乱
するような芝居なんだけど笑える
ところもあつて。若村さん演じる
アンヌのキャラクターに魅了され
るばかりです！

——岡本さんから見た「母」のニ
コラはどんな人間像ですか？

「息子」って感じかな（笑）母
親にとつて息子の存在は愛おしく
て絶対的な愛がある。でも息子と
しては自分の時間も大切だし、強
すぎる母親の愛を全部は受け止め
きれないよつていうニコラのこの
感じ、僕も共感できるし、しかも
セリフの中に実際に僕と母がした
やり取りと全く同じものがあるん
ですよ。母親からの問いかけを無
視してはいないけど、「うーん」

「あーねー、はいはい」とか適当に返事している感じ、ちょっと分かるなって思います。

——岡本さんは台本の翻訳にも携わったと聞きました

「息子」「母」とも翻訳に携わりました。翻訳家の方とドラマターグ*の方と一緒にフランス語と英語の原文を見ながら、どう日本語に翻訳するか話し合っています。家族内の会話って世代によって違うし、例えば今の若い人は父親のことを「おやじ」と呼ぶ人は少なく、パパとかお父さんとかでしょう。この作品は現代劇なので今の時代に合わせた言葉にすると舞台もより家族らしく見える。そういった言葉の調整をやっていました。翻訳って難しく、「分からない」という言葉ひとつにしても直訳すれば「私は知らない」、翻訳してそれが「分からない」になり、そ



岡本圭人さん

れを言葉にするととなると「分からないんだよ」とか「分からねえよ」とかいろんな言い方がある。皆で「こっちの言葉の方がより家庭を見せている感じになるんじゃない？」といった話をする中で、僕は役者の視線から意見を伝えるという携わり方をさせてもらいました。——同時上演ということで稽古も本番も二つの舞台が常に同時進行の状態。集中力の保ち方やパフォーマンスを最大限に発揮するために心がけていることはありますか？

「自分のことを信じてあげる」ですね。積み上げてきた稽古や作品に向き合ってきた時間を支えにして、自分を信じて「僕はできる！」と言い聞かせて不安をなくす。本番中にもしお腹が痛くなつたらとか今考えても仕方がないような不安に対しては、逆に、もしそうなたらその状況を楽しもうとかポジティブに考えるようにしています。そして何より舞台を観に来てくださるお客様の力って本当にすごいです。ゲネプロという本番直前にやる通し稽古があるんですが、僕それが本当に苦手で、頭が真っ白！明日が本番なんて嘘でしょ！無理無理!!なんて思っているがらやって、ゲネプロが終わ

ったあととすぐ気分が落ちる。でもいざ本番を迎えてお客様を前にすると集中できて、これまで積み上げてきたものが全て出し切れる。そういう時、やっぱり僕は舞台が好きだな、目の前のお客様と一緒に感じて、一緒に呼吸して、一緒に舞台をする、ああ好きだなって実感するんです。僕にとつて舞台ってお客様と一緒に作りあげるものなんです。

この他にも「息子」の初演前には実際にフランスに短期間暮らし現地の空気を感じて演技に活かしたことや、尊敬する俳優でもあり父でもある岡本健一さんに対する思いなど、たくさんのエピソードを聞かせてくださった岡本さん。どの言葉にも、舞台が、俳優という仕事、大好きでたまらないという気持ちが溢れているように感じました。舞台にける岡本さんの熱い思いを、高知の皆さんにはぜひ今回の舞台を観て体感してほしいです。岡本さん、ありがとうございます！

※ドラマターグ／舞台の創作現場における様々な知的作業に関わり、そのサポートや調整などの役割を担う者

◆ [Le Fils 息子] 高知公演 日時：5月31日(金) 開場 18:30 開演 19:00
◆ [La Mère 母] 高知公演 日時：6月1日(土) 開場 13:30 開演 14:00

【各公演】

会場：高知市文化プラザかるぼーと大ホール

料金：全席指定（未就学児入場不可）

前売り 一般8,500円 U-23 シート4,500円

当日 一般9,000円 U-23 シート5,000円

販売所：ローソンチケット、チケットぴあ、かるぼーとミュージアムショップ

出演：岡本圭人、若村麻由美、伊勢佳世、岡本健一 ほか



公演情報▲

今年の第三十三回高知出版学術賞に十一冊の図書が推薦された。第一次審査と第二次審査で活発かつ慎重な議論をへて、二冊が「出版学術賞」に、一冊が「特別賞」に選ばれた。

推薦図書の数が一時的低迷から回復したことを確認してほっとしている。推薦図書の高知という文化的空間のバロメーターの一つでもある。数字が正常範囲に戻ったことに安堵の胸をなでおろす。これからも、高知を磁場に、一般読者に高度な知識を届ける著書が多く出版され推薦されることを楽しみにしたい。

今回「出版学術賞」と「特別賞」に選ばれた三冊に共通点があるとすれば、それは、「広く共有されている知識の盲点を補う」というところではないだろうか。多くの人にとってなじみのある人物（牧野富太郎）・テーマ（野球）に、

今までと異なる角度から照明を当てて。あるいは、逆に、あまり注目されてこなかった人物（大江卓）の生涯について明かす。三冊とも読者に新しい視点を提供している。言うまでもないが、三冊とも、読者に学問的方法と知識の世界を覗かせる、しっかりとした書物である。どれも、著者の導きがなければ、容易に踏み入ることができない領域に、読者を導いていく。腰を据えて読んでいく努力と時間を厭わない読者に、その努力と時間に見合う、いや、それを上回る質と量の知識と洞察で報いてくれる。まさに、読者の知識欲を刺激して、さらなる探求へといざなう良書である。

高知出版学術賞

大西比呂志 著

『大江卓の研究 在野・辺境・底辺を指摘した生涯』

（芙蓉書房出版 刊）



本書は、高知県大月町柏島出身の政治家・実業家である大江卓（一八四七～一九二二）の生涯にわたる伝記である。大江自身の言行はもちろんのこと、当時の社会の情勢や周囲の人たちの動向を含む、詳細で、ほぼ網羅的とみてよい記録である。読者にちよつとした背伸びを求める部分もあるが、大江卓と彼にまつわる人物や組織などに関する情報の宝庫である。大江について立体的な理解を得たい人にぜひともおすすしたい。高知県出身の同時代の歴史人物と比べて、大江卓の知名度は高いとはいえない。これには、あまり

にも多岐にわたる大江自身のキャリアも関係しているかもしれない。兵庫県庁事務補と会計官、政府転覆の策謀者、囚人、政治家、経済官僚、朝鮮半島で鉄道建設を請け負う業者、韓国皇帝の顧問、出家して部落融和運動に身を投じる僧侶などなど、ラベル一つでとらえきれない活躍ぶりである。

そのためか、大江の歴史評価も定まらず、賛否両論がある。著者が引用するように、戦前に出された伝記すら「一生を通じて遂に大いに完成する所のものがなかった」と手厳しい。大西は、断片的になりがちな従来の研究と評価を越えた、より立体的な大江像に挑む。大江卓の一貫した精神性を軸に、その多様な立場、場所、役職や職業での業績を内在的に理解する説明を提供しようとする。その精神性とは、底辺の人々への思いやりである。この思いやりこそ、明治初期の賤民廃止令への関わりや神奈川権令としての「マリア・ルス号事件」への対応、また、何十年もあとの大正期の社会活動をつなぎ合わせるカギとなる。

変転目まぐるしい一人の男の人生を語るだけではない。著者の「在野・辺境・底辺」という周縁を歩んだその七十四年の生涯の軌跡

は、もう一つの近代日本の姿をみせる」という抱負も、十二分に実現されている。大江についても知識を深めたい学者にとっても一般読者にとっても、大いに参考になる一冊であるに違いない。

■高知出版学術賞

中村哲也 著

『体罰と日本野球 歴史からの検証』

(岩波書店 刊)



本書は、日本野球界の体罰の実態を資料に基づいて実証的に明らかにする研究書であるが、その意義は学術にとどまらない。野球という国民的文化の伝播の歴史と指導の実態に学術的分析のメスを入れる。野球が大きな人気を誇る高知の人たちにも、是非とも読んでほしい一冊である。学術書として

申し分ないが、高度な専門的知識がなくても十分理解することができると。

本書は、体罰が発生した時代、激化し拡散する要因、組織の実態や社会環境の構造的な変化を追いとりわけ、いわゆる軍隊起源説の影響を意識して論じる。豊富な史料を読み込み整理した野球史であるが、それだけではない。著者いわく、米国から日本に野球が伝播し全国各地へと広がった明治期の野球界には体罰が存在していなかったが、競技レベルの上昇や部員増加で体罰が行使されるようになった、と。野球史を超えた、より普遍的な問いをも我々になげかけているといえる——日本ではなぜ相手ではなく味方に暴力が向かうか、なぜ体罰に耐えてまでスポーツをするか。二十一世紀になっても後を絶たない「負の連鎖」(体罰やしごきを受けた選手たちがやがて指導者として体罰を再生産している)を歴史的に位置づけ、その構造的な要因を明らかにしている点が高い評価につながった。県内の野球関係者はもちろん、全国の部活動指導者にご一読願いたい一冊である。

■特別賞

田中伸幸 著

『牧野富太郎の植物学』

(NHK出版 刊)



本書は、大江卓とは逆に、牧野富太郎という、あまりにもまぶしい光が当てられている人物の実像に迫ろうとする。ここでいう「実像」とは、植物学という純粋に学術的観点から見た牧野の業績とその学問的評価である。この点を丁寧に描き出すと、何が見えてくるか。牧野の「植物相」(フロラ)、なかでも日本産植物のインベントリー(リスト化)に関する業績は偉大である。一方、標本の整理をほとんどせず、論文中で示している標本がどれを指すかが明瞭でないことが多かった。田中は牧野の様々な限界を浮き彫りにして、一見して厳しい結論に至る——牧野の活動を通じて振り返ってみると、

「植物学の世界の権威」あるいは「日本の植物学の父」という賛辞はそぐわない、と。

しかし、誤解してはならない。著者は、牧野植物園研究員および標本室長をも務める経歴の持ち主。牧野の業績を否定しているわけではない。牧野自身の言葉を引き、「草木の精」と呼ぶのがふさわしい、と付け加えている。言い換えれば、牧野富太郎の魅力は、学術性という一言で語りつくされない、というわけである。

今後、歴史に名を遺した偉大な高知人たちへの正しい理解を市民に共有させる図書が、数多く出版され、本賞に推薦されることを期待したい。

ヨース ジョエル

一九七〇年、ベルギー国ゲント市生まれ。

二〇〇一年、ベルギーにあるルーヴェンカトリック大学で博士号を取得。二〇〇八年より高知在住。

高知県立大学文化学部教授。第三十三回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本文化論、日本思想史。

新しい時代の地域社会づくりは 土佐の高知から

福田 善乙

日本の人口は2010年の1億2,806万人をピークに減少し、2022年には1億2,405万人になっている。そのなかで、都道府県レベルでみると、東京都を中心とする東京圏（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県）は人口が増加し、2020年には3,691万人（日本の人口の29.3%）になり、一極集中型の国土になっており、過密都市問題が現出している。

他方、農山漁村地域を中心とする地方は人口減少が深刻化している。高知県は1985年の84万人をピークに一貫して人口減少化が進み、2020年には69.2万人となっている。これが2050年には45.1万人まで減少すると予測されている。そのため、高知県の政策課題のトップに、人口減少問題への対応が求められている。

人口減少を考えると、合計特殊出生率^(※)が課題となる。日本の合計特殊出生率は1.26(2022年)と世界的に低い水準である。東京都は1.08と全国で一番低いのに対して、高知県は1.36で全国水準を超えている。しかし都道府県レベルでみると、人口の自然増減（「出生者数」－「死亡者数」）は、全ての都道府県でマイナスである。それゆえ都道府県レベルの人口増減は、社会増減（「転入者数」－「転出者数」）に大きく依存しており、東京圏など過密都市の人口増加は、農山漁村地域の地方からの人口流出に依存しているのである。

しかし、この人口の移動（＝流れ）に変化が起きているようである。すなわち、農山漁村地域を中心とする地方から過大（過密）都市への人口の流れとともに、過大（過密）都市から農山漁村地域を中心とする地方への人口の流れ（＝移動）が始まっているといえよう。それが「移住」という姿で進んでいるように見える。これは人口の新しい流れでもあるし、新しい時代への変化を示しているといえる。東京・有楽町で移住相談を行っている「認定NPO法人ふるさと回帰支援センター」が2021年に東京圏の人たちに行った調査によると、「転居・移住に関心あり／違和感あり」と回答したのは約610万人（推計）で、そのうち「地方への移住を希望している人」は約309万人（推計）もいる。その中で「地方移住を具体的に計画している人」は約53万人（推計）にのぼり、しかも20代～40代の若い人に多い。この移住先に高知県は上位（2019年の調べで9位）に挙げられている。これは何を意味するのか。まさに過大（過密）都市から地方への人口移動を予告するものである。

このような全国的な流れ（＝変化）の中で、高知県は人口減少にどのように対応する必要があるのか。高知県は社会動態（「転入者数」－「転出者数」）が1,416人マイナス（2021年）であるが、これをゼロないしプラスにすることである。現に高知県への移住者は、2012年度は225人であったのが2021年度には1,628人に増加している。しかも2021年度の高知県への移住相談者は3,976人にもなっている。さらに移住相談者数は毎年4,000人前後にのぼっている。それゆえ、過大都市で生きづらく、住みづらくなっている移住者を、毎年3,000人にすれば人口の社会減は解消されるといえよう。

この移住者が増加する要因として「地域おこし協力隊」の存在があり、このことについて述べてみたい。

地域おこし協力隊は「条件不利地域や過疎地域で地域活動に協力することにより、地域への定住・定着を図る」ために、総務省が2009年に制度化したものである。実施主体は地方公共団体、活動期間は概ね1年以上3年以内であり、2022年度は2億4,000万円の予算である。この地域おこし協力隊員は2009年度の89人（31団体）から2015年度は2,799人（673団体）、2021年度は6,015人（1,085団体）と急速に増加している。都道府県別の隊員数（2022年度）をみると、1位：北海道（821人）、2位：長野県（428人）、3位：高知県（225人）。なんと高知県は全国3番目に人気のある県、すなわち隊員たちの希望を託される県である。また隊員の任期終了後の定住者数（2021年）をみると、1位：北海道（1,114人）、2位：長野県（455人）、3位：鳥根県（415人）、4位：高知県（327人）で、こちらも全国上位である。ただし、定着率をみると高知県は65.1%であり、全国水準の65.3%とほぼ同じであり、改善の余地は大きい。

高知県の地域おこし協力隊員およびOBは、高知県の地域活性化に大きく貢献している。例えば高知県の農林漁業への従事、農産物の加工の開発や商品化の促進、高知県の食材を生かした飲食店の開業、古民家の改修によるゲストハウスの経営、自然や環境を生かした観光開発、土佐和紙や土佐打刃物など地域産業の継承、川を生かしたラフティング・カヌーの体験学習、地域の祭りや踊りなど地域文化の継承と発展など、多様な取り組みを行っている。しかし、高知県の対応は十分であるとは言えない。地域おこし協力隊のOB・OGネットワークの形成についても以前から提案していたが、2023年度にやっと成立したところである。

いずれにしても、「これまで在住している高知県民」と「移住で新しく高知で生活することになった高知県民」が共に力を合わせて、新しい高知県をつくる時代になったのである。そこで、新しい時代のあり方を述べるとしたら、次のように宣言したい。

“新しい時代の地域社会づくりは、土佐の高知に集う人たちの間（人間）^{じんかん}から始まる”

詳細は拙稿『日本の移住政策と人口減少地域（高知）の対応と課題』（四銀地域経済研究所『四銀経営情報』No.185、2023年4月号）を参考にしてください。

注釈（※）合計特殊出生率

「15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの」で、一人の女性がその年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数に相当する。

ふくだ よしお

1941年高知市生まれ。

1968年大阪市立大学大学院博士課程を中退し、高知短期大学へ赴任。2006年定年退職。現在、高知短期大学名誉教授、四銀地域経済研究所客員研究員。

「ハードボイルドは好きですか」と 問いたい書店員がここにいます

山中 由貴

みなさん、ハードボイルドは好きですか。

と問いたいのだけれどそのまえに、「ハードボイルド」とはどんな意味なのか。

『三省堂国語辞典 第八版』では「①事件や場面を、さめた見方でえがくようす。また、そのような作品。②さめた見方や行動（をするようす）」とある。ウイキペディアには「文芸用語としては、暴力・反道徳的な内容を、批判を加えず、客観的で簡潔な描写で記述する手法・文体をいう」と載っている。

わたしはこのハードボイルド小説が大好物で、なかでもとりわけ

クールで飄々としていて、女にも男にももてるし強いんだけど喧嘩

にはときどき負けるし誰も笑わないジョークを言う、みたいな主人公が活躍する作品がドストライク

に好きだ。好きだ、だけではとても足りない。大大好きだ！！そんなわたしがいま誰彼かまわず布教したいハードボイルドが、

萩堂顕さんの『不夜島（ナイトランド）』なのである！

第二次世界大戦後、米軍占領下の沖縄・与那国島。密貿易で栄える久部良はまばゆいネオンで彩られた眠らない街。〈不夜島〉という異名を持つその〈街〉で、台湾

人の武庭純は密貿易のブローカーをしてる。島に逃亡してきた元

憲兵の殺人鬼を秘密裏に探してほしいという警察からの依頼や、アメリカ人の雇い主から、含光と

呼ばれる未知なるものを手に入れるという指令を受けた武は、自ら人脈と機転を武器に調査を進めていく。

この主人公、武がとにかくもう惚れ惚れするほどかつこよくてスマートなのだ。クルーカットにサングラス、袖を切ったHBTジャケットを羽織り、足元はブーツ、「長寿」という台湾煙草を愛飲する四十がらみの男だ。自分が認めた客しか酒を飲ませないナイトク

ラブの女主人、トキコとも親しく、島の青年、玉城にも喧嘩で勝って以降慕われている。島の警部の個人的な頼みもしぶらず引き受けるし、台湾人の大物フィクサーにも顔が利く。そして過去に傷を抱えている。こんな主人公好きいいい！が具現化したような、惚れ惚れする人物なのだ。

敗戦を受け入れられずに殺人を繰り返す元憲兵の糺大尉や、武を援護（もしくは監視？）する本土からの応援、毛利巡查、存在自体が謎の情報屋（空箱子）など、アクの強いキャラクターがたくさん出てくるさまは、まるで漫画『ゴールデンカムイ』のような華々しさ！

たまに垣間見える武の弱み、毛利の能面サデイスティックの奥にある愛嬌、玉城はただただかわいく、糺大尉はイッチャってる…。読んでいくうちに彼らのおかしな魅力にとりつかれていくのが楽しい。

そしてもうひとつ、この作品の醍醐味はサイバーパンク小説だということだ。

サイバーパンクとは人体などを機械的・生物工学的に改造した、

いわゆるサイボーグの概念が登場するSFの一ジャンルのことだ。

『不夜島』では、戦争によって欠損した腕や脚を（義肢^{クローム}）を装着することで補強したり、皮膚を人

工スキンで覆っていたり、果ては脳を電脳に置き換えたりと、生身の人間ではない者が多くいる。もちろん史実とは異なる設定ながら、戦後間もない沖縄や台湾の不安定な時代に説得力あるSF要素が加味され、虚実まじえた独特の世界観を確立していることに唸らされる。

その肉体変化が武たちの追い求める「含光」の正体に迫る鍵でもあるわけだが、彼らはやがて人類の根源をも変えてしまう企みに気づき、仲間とともに命懸けの大博打を仕掛

けるのだ――。

どうだろう。なんか小難しそうだなと思われる気もするけれど、映画やなんかではこのぐらいのおっ飛んだ設定にわくわくする方も多いのではないだろうか。それこそ久部良のネオンがぎらついた街並み、武が与那国馬に乗って駆ける島の丘陵地帯や海岸、船上シーンや台湾での潜伏シーンなど、読むだけで壮大な光景が広がるのもこの作品の素晴らしいところだと思う。ほんとうにセットからアクションまで金かけた上質な映画を観ている気分だし、さまざまに見せ場が惜しみなくてんこ盛りで、物語に狂おしいくらい没頭してしまうのだ…！

映画『007』（ダニエル・クレイグ版最高！）の洒脱ハードボイルドな世界観、『宝島』（真藤順丈著）の戦後沖縄を生きる島人のしたたかさや魂、『流』（東山彰良著）での猥雑な台湾の空気、ゲーム『メタルギアソリッド』の

隠密作戦。それらの要素を詰め込みつつ、唯一無二の物語になっているので、もう、どうぞ安心してこのエンターテインメントに溺れてほしい。

幼少のころの記憶という、いっとう大切に純真な自分の魂を追い求めながらも、アウトローに生きる武が、最後にどんな光景を見つめるのか、心震える結末まで駆け抜けてほしい。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。
TSUTAYA中万々店の書店員
なかましんぶん編集長としてX
(旧Twitter) やってました。
好きな本について喋るときだけ
饒舌になります。

映画とライフ・イズ・ビューティフル なご縁

山崎 伸子

「映画ライター山崎伸子」を名乗って、早いもので四半世紀が経ちました。なぜ映画なのか？ 実は私、幼少期から大の映画好きだったわけではありません。きっかけは、名古屋のエリア情報誌の編集者として、たまたま映画コーナーを担当したこと。そこで映画の魅力にどっぷりハマり、ある日「今後は映画でやっていくぞ！」と無謀にも決断。紆余曲折を経て、今に至ります。

私の仕事内容は、映画のレビューや取材記事など多岐にわたりますが、一番好きなのはインタビュアーです。初めて合同インタビュアーに参加したのは、『恋する惑星』（95）のウォン・カーウアイ監督の来日取材でした。緊張しすぎて内容はあまり覚えていませんが、監督の熱意に心を打たれました。以降、映画やドラマに関わる数多くのキャストやスタッフ陣を取材してきましたが、みなさんからは共通して「良い作品にしたい」

という情熱が感じられ、私も非力ながらライターとして、総合芸術としての作品の魅力を多くの人に伝えたいという気持ちが強くなっていきました。長年活躍されている方々は何度も取材させていただくので、その変化も実に興味深いです。例えば、光る原石だった新人俳優がビッグスターになっていったり、野心むき出しで青かった監督が風格のあるベテランになったりと、作品の舞台裏でもいろいろな「人生劇場」が繰り広げられています。

また、良い作品に出会うと、パワーをもらえます。今年の日本アカデミー賞授賞式で、妻夫木聡さんが「僕は映画の力を信じます」と力強く語っていました。私も心からそう思います。私にとつての生涯ベスト1映画と座右の銘は『ライフ・イズ・ビューティフル』。一九九九年に日本公開された本作は、第二次世界大戦下のホロコーストをある親子の視点から描いた



『ライフ・イズ・ビューティフル』のロケ地での筆者

感動作です。当時、どこか人生において足踏み状態だった私は、この映画を観て号泣。文字どおり、人生や命の美しさ、力強さに、心をもつていかれ、完全にノックアウトされました。そして約一年後、会社を辞めて映画ライターになるべくフリーになり、上京！

近年、特に心に残っている仕事は、二〇二一年の『竜とそばかすの姫』でのインタビュアーです。本作では佐藤健さんたち主要キャストと細田守監督に話を伺いましたが、みなさんの本作に懸けた想いがとても強く、私自身も感銘を受けました。そしてその翌年、なんと！本作の舞台である高知へ移住することが決定！これもご縁ですね。

さらに昨年は、かるぼーとで行われた「Gift of Life」にぎやかな

植物園」という市民ミュージカルに初挑戦しましたが、そこで初めて自分が「演者側」に立ったことで、俳優陣へのリスペクトが増えました。非常に感慨深い経験で、改めてライターとして襟を正した次第です。また、作品自体も、まさに「ライフ・イズ・ビューティフル」というテーマで、自分自身もかけがえのない「ギフト」をいただきました。そこでの出会いも一生の宝物です。

様々なご縁がつながって今の自分がいます。これからも日々感謝の気持ちを忘れず、たくさん作品を観て、いちライターとして心を込めてたくさんの方々の記事を執筆していきたいです。

やまごき のぶい

一九六八年 三重県生まれ。

映画とお酒をこよなく愛するライター、時々編集者&カメラマン。名古屋の女性エリア情報誌編集長を経てフリーに。現在は、MOVIE WALKER PRESSやマイナビ、Hugobunなどで映画やドラマのインタビュアーやニュース、レビューなどを執筆。二〇二二年に高知県へ移住し、東京と高知の二拠点で活動。

「アンテナ」温仙人



下尾 仁

二〇二三年九月、とある広告代理店から電話がかかってきた。内容は、奥四万十にある温泉のPR動画を撮るので僕に協力してほしいとのこと。ストーリーはまだ決まっていないが、僕にやってほしい役だけは決まっているという。話を聞くと、奥四万十の温泉を熟知した仙人、その名も「温仙人」をやってほしいということであった。面白そうだったので、もちろんやりますと返事をした。この時点ではまだ、制作は正式に決定はしておらず、内容を固めて温泉側にプレゼンして了承を得て、十二月ぐらいから撮影スタートという流れであった。だが、決定していないにもかかわらず、僕はハートに火が着き「仙人といえば長髪と髭だ!!」と思い、この日から髪を切らず髭を伸ばしはじめた。

影スタートであったのが一月からになったとのこと。内容やスケジュールが決まり次第連絡してくれという話になったので、僕は髭を伸ばし続け、知り合いやお店のお客さんに「髭伸びたねー」と言われ、ある時から「仙人みたいやね」と言われるようになっていた。そしていよいよ内容やスケジュールが固まった。主要な登場人物は三名。ストーリーはこうだ。都会暮らしに疲れ、なんとなく高知に移住してきた『名湯巡』は、高知の魅力を発信するため地元タウン誌に就職する。しかし、高知は自然も食も魅力的だが、どれも誌面のネタにするには定番過ぎる。もう少し変わったネタを探してオフィスで苦悩していた彼のもとに、僕が演じる「温仙人」が現れ「奥四万十温泉郷に行くのじゃー」と告げる。言われるがまま温泉を訪れた巡は、そこで再び温仙人と出会い、奥四万十の温泉の魅力にはまっていく……という全六話の構成。そのうちの二話では巡の恋人『温泉』も登場することになって



優しく微笑む温仙人（筆者）

いる。撮影スケジュールは一月後半から二月いっぱいを予定していたらしいが、僕が二月の半ばに別のCM撮影の予定があり髭を剃らねばならなかったため、スケジュールを大幅に短縮し約二週間で全話の動画を撮ることに。撮影が近場であれば問題ないが、温泉一軒一軒の距離が離れているので、移動時間などを考慮すると、なかなか大変なスケジュール。しかも最初の撮影地である梶原町の「雲の上の温泉」は、撮影前日に雪が降り積もり撮影延期に。ますますタイトなスケジュールになってしまった。その後、日を改めての初撮影は中土佐町の「黒潮本陣」であった。黒潮本陣と言えば、海を見下ろす絶景の露天風呂。しかし天気予報は曇りのち雨。午前中の曇りのうちになんとか撮影できればと車に向かっていったが、途中から雨がぱらつき出し、到着時には結構な雨に。カメラマンは「これは無理だ」

と言っているし、温泉の撮影ができるのも一時間だけと決められている。またしても撮影延期か……との思いがよぎったその時、奇跡的に雨が上がり露天風呂の撮影もできた。撮影が終わる頃にはまたしても雨が降り出したので、間一髪ギリギリセーフの撮影となった。それからは「雲の上の温泉」、「そうだ山温泉」、「ホテル松葉川温泉」、「十和温泉」、「郷麓温泉」と、それぞれの魅力を伝える動画の撮影も順調に進み、無事にクランクアップ!! 温泉に入り続けたことでお肌もツルツル、健康的になった。そしてこれまで伸ばしていた髭も剃り、別の案件のCM撮影も終了した。

温泉PR動画は、この原稿を書いている現在、どこでどんなふうに見られるのかは決定していないらしいが、もし見ることがあれば「温仙人」の仕上がりを確認し、ぜひぜひ奥四万十温泉郷に癒されに行ってもらいたい。

「さあ、体を清めて、湯に浸かろう」 by 温仙人

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

2 ~ 3月の事業から

「ばぶれりぐる」にはおとこぜんはじがある

土佐清水市出身の劇作家・俳優の竹田モモコさんが率いる、演劇ユニット「ばぶれりぐる」の高知公演を、二月二十九日（木）、三月一日（金）に開催しました。ばぶれりぐるは、幡多弁が飛び交う作品が特徴で、二〇二〇年関西演劇祭ベスト脚本賞、同年の第二十六回劇作家協会新人戯曲賞に続き、二〇二二年「日本の劇」戯曲賞最優秀賞を受賞した演劇界最注目存在で、高知には三年ぶりの凱旋公演となりました。

本公演に向けたインタビューで竹田モモコさんが「自分と同年代の人たちを褒めてあげたいという思いで書きました」と言われていたように、物語の基軸は古川家の二人の姉妹。イラストレーターとして神戸で活躍し、実家の離れに引っ越してきた姉（早希さん）と、地元で就職・結婚し、実家を守り、子どもを育てた妹（陽子さん）。好きなことを仕事にして生き、それ以外のことは上手く立ち回れない早希さんと、地元の真つ当な価値観の中で、どこか自分を殺して生きてきた陽子さん。そんな二人の間で揺れな

がら、自分の進む道を考える陽子さんの一人娘（みまちゃん）と、どこか遠親した存在のみまちゃんのお父さん、この街に移住してきた大手広告代理店で働いていた若者の五名全員の人物描写が素晴らしく、それぞれの「幸せ」を深く考える作品となりました。

劇中、印象に残ったのは「好きなことを仕事にするのは危うい」という台詞です。みまちゃんの絵の才能を見抜き、イラストの仕事を斡旋する早希さんに対し「ずっと競いあって、しんどい思いをすることが幸せなのか」「地元の店で心穏やかに働く方がずっと幸せだ」という陽子さん。これは作品を世に出し、評価のあらしに飛び込まないと生きていけない演劇人の竹田モモコさんを、人間竹田モモコさんが俯瞰して描いているように思えました。

来場いただいたお客さまからは「生きるということがリアルに描かれていて、どんな生き方をしている人にも共通点があると思う」「物語の底辺に流れるのほの明るさに救われました」「この舞台を高

知で観劇できたこと、本当によかったです。高知に限らず、地方に生まれた人みんなの心に響く作品でした」という感想をいただきました。



会場 場 かるぽーと小ホール
入場者数 一三〇名

高知市文化振興事業団

第十二回高知の音楽活性化事業

「木管五重奏 Quintet H アンカーズ」

「高知の音楽活性化事業（通称・おんかつ）」は、アーティストが数日間高知に滞在し、コンサートだけでなく様々な地域交流プログラムを行う企画です。十二回目となる今回は、日本を代表する木管五重奏団である Quintet H（クインテット アッシュュ）に、三月六日（水）から九日（土）の日程で高知市にお越しいただきました。Quintet H の高知訪問は、二〇一〇年以来十四年ぶり。このおんかつの記念すべき第一回目のアーティストが Quintet H でした。当時、ファゴット奏者の石川晃さんが前メンバーの代役として演奏されていたのですが、高知での活動を経て正式メンバーとなり、新生アッシュュが結成されたことが昨日のことにように思い出されます。最近はその活動が減ってきていた中、メンバーにとってゆかりの地となった高知で、久しぶりにグループでの活動ができることを楽しみにしていたようです。

今回、コンサートの前に訪問した交流先は、義務教育学校行川学園、養護老人ホーム高知市福寿園、春野東小学校、高

知小津高等学校吹奏楽部の四か所です。それぞれの訪問先で四十五分～六十分演奏だけでなく楽器紹介や対話を重視した内容で地域交流を行いました。行川学園では、新型コロナウイルスの影響でしばらくできていなかった「給食交流」を再開。給食後の昼休みには急遽教室でサイン会が開催され、多くの児童や先生が訪れていました。コンサートではできない、このような交流がおんかつの醍醐味でもあります。良いところだと改めて認識しました。また、最後に訪問した小津高校では、同校での交流が終わろうとする頃、

吹奏楽部員の十六歳の女の子が「私が二歳の時（十四年前）初めて家族と行ったコンサートが、かるぼーと



行川学園での給食交流の様子

で開催された Quintet H のコンサートでした。私は覚えていませんが、両親が教えてくれました」と言ってくれました。当時の子どもが今、吹奏楽部員として音楽をしていることにアッシュュのメンバーもスタッフも大変感激しました。

コンサートでは、演奏の間のトークでもオーボエ奏者・最上峰行さんの漫談!?!とも思われるほど笑いが絶えず、演奏と笑いのメリハリを利かせたコンサートになりました。ロビーには十四年前のおんかつでの地域交流やコンサートの写真も掲示し、「当時、私はここに居た」と教えてくれるお客様の姿もありました。来場者の半数以上にアンケートに答えていただき、多くの方が再演を望んでいました。十四年後と言わずに、また近い将来、Quintet H と共に高知を駆け回る日が来ることを楽しみにしたいと思います。今回、ホルン奏者の猪俣和也さんは一日早く高知入りし、ツーブロックにカットし気合いを入れた髪型で参加。フルート奏者の宮崎由美香さんは空き時間に市内を散策しショッピングを楽しみ、クラリネット奏者の濱崎由紀さんは高知の地酒を何杯も楽しまれるなど、ここには書ききれない色々な思い出ができた四日間となりました。

会場 かるぼーと大ホール
入場者数 五七〇名

高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品



「労働者の祭典…メーデー」

小笠原 武明

(昭和41年5月1日 上:高知市役所前
下:高知市NTT中局北通り※現・ひろめ市場南道路)

昭和41年の「第37回メーデー」当時を回顧すると、高知市長は氏原一郎さん。土佐高校が甲子園で準優勝。南国土佐は地の利を生かして園芸大国。ナス、キュウリ、トマトを全国の食卓に毎日貨車15両！活力に満ちた昭和の良き時代でした。

大河ドラマ効果だろう。「源氏物語」がブームである。本、雑誌、メディア等に「源氏物語」についての情報があふれている。刺激されてこんな自問自答をした。

光源氏は女性への敵ではないのだろうか？
たとえば、源氏は藤壺の女御の寝室に忍び入り強引に関係を結んでしまふ。藤壺は不義の子供を産む。藤壺は天皇の妃だ。これは当時においても「大逆」と言わなければならない道な行いである。

優雅に装われているが、源氏の女性に対する傍若無人なふるまいは枚挙にいとまがない。にもかかわらず、どうして光源氏は多くの読者——特に女性——から愛されるのだろうか？

それは、『源氏物語』の第一帖「桐壺」に巧妙な仕掛けがあるからだと思う。

源氏は幼くして母——桐壺の更衣を亡くす。美しい更衣は帝の寵愛を一身に受けながら、身分の低さゆえに後宮内の陰湿ないじめの標的となり悲劇的に死んでゆく。死んだ母は年をとらない。永遠に美しい。

年月は流れて、源氏の母恋は母とつり二つだと言われる藤壺の女御を

光源氏は女性の敵ではないのだろうか？



風俗歳時記

慕つ気持ちに変わる。だが十二歳で元服した時、父帝から「お前も一人前の男になったのだから妃の部屋に入ってはならない」と敵命される。源氏は藤壺の奏でる琴の音色を遠くから聴いて女御をしのぶ。その想いがやがて激しい恋心に変わってゆく。けれど藤壺は父帝の妃である。近づくことは絶対に許されない。絶望した源氏の情熱が多くの女性との恋愛遍歴へと変換されてゆく。その心情の移りゆきが読者には痛いほどわかる——そういう巧みな描かれ方をしている。

いつの間にか読者は源氏の側立に立って、源氏を擁護してしまう。源氏が藤壺を犯す場面においてさえ、母恋の情は男女に共通する。女性読者も男性読者も源氏の藤壺への恋情を自分事のように感じてしまふ。そのために「悪」だと知りつつも、源氏に共感する。「桐壺」の巻を通して源氏と読者は共犯関係に入るのだ。
紫式部の卓越した文章がそのマジックを可能にしている。千年の時を超えてもなお万人を魅了する語りの方に圧倒される。

(本の虫)



仕立て屋のサーカス

どこか遠い国の果てまで漂うような音楽、揺れる布、映り込む光と影、喧騒と静寂。

音楽家・曾我大穂が主宰・演出し、

金沢21世紀美術館、神奈川芸術劇場、京都芸術センター、海外ではフランス、スペイン、インドネシアで上演を重ねる、即興で繰り広げる、音と布と光の幻想的なサーカス舞台。

日時：6月22日(土)16:30開場18:00開演・6月23日(日)13:30開場15:00開演

会場：高知市文化プラザがるぼーと小ホール

料金：全席自由 一般 3,600円(当日4,600円) 学生 2,000円(当日2,500円)
18才以下無料(限定枚数/要予約)

主催：公益財団法人高知市文化振興事業団

お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071 <https://www.kfca.jp/>

風伯

百万円

これは一九四八年の高知新聞記事にある。「一競馬百万円説」といわれ財源を狙った新競馬場の誘致合戦が凄まじかった。当時の中村競馬、伊野競馬、日章競馬、片地村や東又村の競馬新宇佐競馬が手を挙げた。高知市の候補地は朝倉の練兵場跡や大原町の市営グラウンド。さらに別の案もあったが、結局棧橋競馬場の復活案に決まった。

中学生のころ井上陽水の『人生が二度あれば』を聴いて、六十五歳は凄まじい年寄りなんだと思った。その歳になった。ある日気が付くと、目の前に二十代の学生がいる。競馬史について聞いてくる。私を歴史の生き証人扱いで、頭の中がまた学生気分、私は、重ねた馬齢を思い知る。彼は終戦直後の言葉「百万円競馬場」に注目していた。

同記事中に競馬場新設には五百万から一千万円かかるから、当時の百万円の価値は相当なもの。百万長者といえばミリオネア・富豪の意味もある。夢のような、百万円競馬場。いの大國さま秋大祭。草競馬場跡に近い仁淀川の御旅所へ。年配者で人の輪ができていたので、ダメもとで声かけする。「百万円競馬場って、聞いたことないですか」。やはり皆知らなかつた。

私が子どものころ、百万円は大金の代名詞だった。近年インフレが加速。高知競馬場の年間売り上げなど百億円単位。若い学生に三四半世紀前の百万円の高揚感を伝えられたか。

親の入院のため、病院で書類を書かされる。保証人の書類に保証限度額を書く欄があって、金額を聞くと「百万円と書いてください」と言われた。私には今でも大金だ。

(三)



探偵マーロウ

©2023 PanPlus Films (Malibu) Ltd. / Hills Productions A.E. / Davis Films

第203回
市民映画会

6月29日(木)
6月29日(金)

高知市文化プラザがるぼーと 大ホール

上映時間
探偵マーロウ
①10:00 ②14:55 ③19:30
あしたの少女
①12:20 ②17:00

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。
一般：前売券 1,300円、当日券 1,500円
割引：1,000円(映画会当日に会場販売)
※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引
【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

あしたの少女

N E X T S O H E E

©2023 TMNPLUS PARTNERS INC. & CRANKUP FILM ALL RIGHTS RESERVED.

今号の表紙

登った

結城 きずな

龍門を登りきった鯉

(ゆうき きずな /

龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)

公益財団法人高知市文化振興事業団 主催事業のご案内

第76回高知市文化祭



文化高知 No.235
2024年(令和6年)5月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団

〒781-9529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-1071



第76回
高知市展
アンデパンダン

絵画(洋画) / 日本画 / 書道 / 先端美術(立体) / 彫刻 / 陶芸 / 工芸 / 写真 / ペン字 / デザイン / 北見市美術交流作品

会期 2024年5月25日[土] ▶ 6月9日[日] **会場** 高知市文化プラザかるぽーと 7階 市民ギャラリー
午前9時 ▶ 午後6時 [月曜休館] 初日 午前10時開場 最終日 午後4時終了

入場料 ▶ 前売 300円 [当日400円] ■ 療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者と
その介護者1名、及び65歳以上と高校生以下は無料

作品搬入 日時 ▶ 5月19日[日]・20日[月] 午前10時～午後5時 **場所** ▶ 高知市文化プラザかるぽーと7階市民ギャラリー **出高料** 1部門につき一般1,500円 / 学生1,000円

■お問い合わせ: 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071 ■主催: 高知市展代表委員会・公益財団法人高知市文化振興事業団・高知市
■共催: 高知新聞社・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ

デザイン: 中野碧巴

<https://www.kfca.jp> e-mail kikaku@kfca.jp